

ユング心理学から見たアマテラス神話解釈の可能性： 現代女性の自己実現の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松橋, 朝美 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/631

ユング心理学から見たアマテラス神話解釈の可能性

—現代女性の自己実現の観点から—

松 橋 朝 美

キーワード：個性化の過程、元型論、日本神話、岩屋戸籠り、現代女性の自己実現

現代の日本社会において女性の社会進出が進む中、雑誌やビジネス書などでも女性の自己実現について取り上げることが増えてきたのではないだろうか。しかし、自己実現の意味が自分らしく生きていくことであるのなら、父権的価値観が優勢な現代社会の中で社会的成功を収めることだけが「女性」としての自己実現とは言えず、女性である自己を肯定していくことで築ける自己実現もあるであろう。

本論文では、自己実現とはユング（1875－1961）が論じている「個性化の過程」を生きることであると定義し、ユングが論じる「個性化の過程」と「集合的無意識」「元型論」の考え方をまとめていく。また、現代女性の自己実現とは何かという答えが、日本のユング心理学者たちが行っている日本の女神・アマテラスの神話解釈の中にあるのではないかという仮説を立て、アマテラスが岩屋戸に籠りアメノウズメらによって外へ導き出されるという一連の出来事についての心理学的解釈を「個性化の過程」という観点からまとめる。そして最後に、アマテラスが体験したであろう「個性化の過程」を現代女性のこころの成長と重ね合わせ、アマテラス神話解釈から読み取れる現代人女性の自己実現の可能性を考察する。

I. はじめに

心理学的な「自己実現」の考え方は諸説あり、自己の内面的欲求を社会生活において実現することとして、自己実現の概念はカール・ロジャーズ（1902－1987）やアブラハム・マズロー（1908－1970）らによっても論じられている。

女性の社会進出が著しい現代の日本において、社会の中で高い地位を得ることも、女性の成功として「自己実現」の一つであろう。しかし、ユング派の女性心理分析家・ペレラ〔1998〕は、社会的な成功をおさめた女性たちが、外見上は成功者とみられる一方で、本来女性たちが持っていたはずの豊かな女性性の本能を拒み、犠牲にしたことに苦しんでもいると語る。ペレラ〔1998〕はこのような女性たちの問題を、男性的な考えが優先される父権社会に生きる女性特有の悩みととらえ、それを解決するためには精神分析家のユング（1875－1961）の言う女性性の受け入れがたい側面、つまり曖昧さや受動性、母性が持つ負の側面を受け入れていくことが重要であると

指摘している。

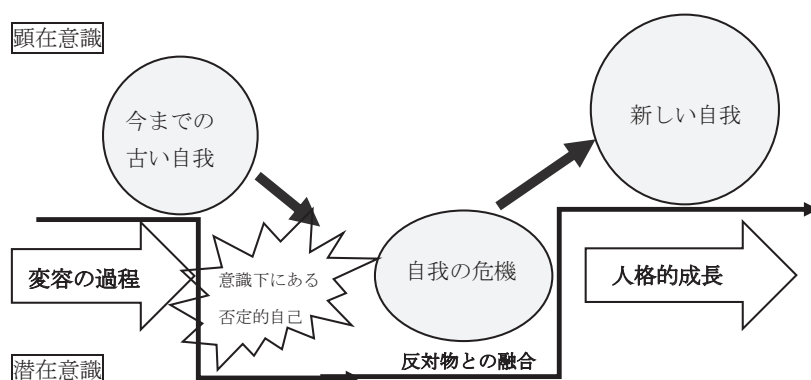
ユング [1995] は『自我と無意識』の中で「個性化の過程」という独自の概念を説き、それを「自己実現」と同じものだと言っている。ユングの説く「個性化の過程」とは、本来の自分らしさを取り戻していく「個人が自分自身になること」の過程である。その過程は人類に共通する様相を持ち、それゆえに根源的なモチーフとして神話などで示されることが多いとユング [1995] は語る。そして、ユング派分析家でもある臨床心理学者の河合隼雄 [2003] は、神話は人間存在の最も根本的なことに関わるため、生きるための深い知恵を学ぶことができ、また、人々が同じ神話を信じて生きることで所属感や他人とのつながりが生まれるとも述べている。そして、河合 [2003] や林 [2004]、織田 [2006]、廣澤 [2002]、土沼 [2002] らは日本の総統神アマテラスの岩屋戸籠りの神話に心理学的な解釈を行い、その一連の出来事をアマテラスの心的成長の過程として心理学的解釈を行っている。

そこで、本論文ではアマテラス神話に日本女性の根源的な自己実現の過程が描かれていると想定し、ユング心理学の「個性化の過程」「元型論」「神話についての概念」をまとめるとともに、アマテラス神話にユングの語る「個性化の過程」を重ね合わせ、アマテラス神話の解釈を行っていく。その後、アマテラス神話の中に女性の自己実現のヒントが隠されているとしたら、それはどのようなものなのかを考察する。なお、本論文ではアマテラス神話を取り上げるため、日本神話を『古事記』と『日本書紀』に書かれたものと狭義し、また、日本の公式の年代記として「合理的思考」によってまとめられたとも考えられる『日本書紀』に比べ、『古事記』の方が元来の日本神話に近いという考えのもと、『古事記』に書かれたアマテラス神話を取り上げる。

Ⅱ. ユング心理学概論—個性化という「自己実現」

Ⅱ－１. 個性化の過程と元型論

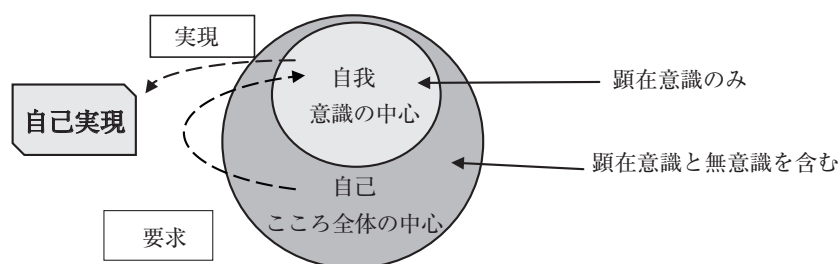
まず、ユングの語る自己実現、「個性化の過程」とはどのようなものをまとめていく。『ユング心理学辞典』のサミュエルズら [1993] によると、個性化とは「個人が自分自身になること。つまり、自らの存在が不可分、全体的となり、かつ他の人々や集合的な心理状態から区分されていること」であり、「個性化のプロセスの目標は人格の発達」であるという。個性化のプロセス、変容は自然なできごとから生じることもあれば、心理分析などの人為的なプロセスから生じる場合もある。そのプロセスの過程で、今までの自分を否定せざるを得ない状況、つまり自我の危機に陥ると、今まで否定して意識下に抑圧していた自分の劣等な部分と直面することになることが多い。しかし、そこで抑圧していたものに直面し自分の否定的側面を受け入れることで、統合的な自己に近づいていく。例えば、論理的思考が強く感情的になることを否定していた人に個性化のプロセスが起きた場合、自我の危機に陥ることにより自分の感情的な側面と向き合うことになり、その結果、今まで否定していた感情的側面とも融合することができ、新しい自我として人格的成長を遂げることができる。以上の点を図示すると図Ⅱ－１のようになる。



図Ⅱ-1 ユングの語る個性化の過程

ユング [1995] は『自我と無意識』の中で、「個性化」とは「自己自身になること」であり、「自己実現」とも言い換えることができると述べている。ここでいう「自己」とは具体的にどのようなものであろうか。河合 [1977] は『無意識の構造』の中でユングの言葉をまとめ、「自己はこころの全体像であり、また同時にその中心である。これは自我と一致するものでなく、大きい円が小さい円を含むように自我を包含する。」と述べている。なお、ユングはこころ（psyche）の基本的な定義を「意識、無意識すべてを含めた、こころのあらゆるプロセスの全体」としている。[サミュエルズ他 1993]

これらを要約し、ユングの語る「自己実現」を簡単に述べるならば、普段の我々の意識の中心が「自我」であるのに対し、意識と無意識を含んだ「こころ全体」の中心が「自己」である。そして、そのこころ全体の中心である「自己」が要求する自分らしい生き方を意識の中心である「自我」が実現していくことが、ユングの語る「自己実現」と言える。（図Ⅱ-2）



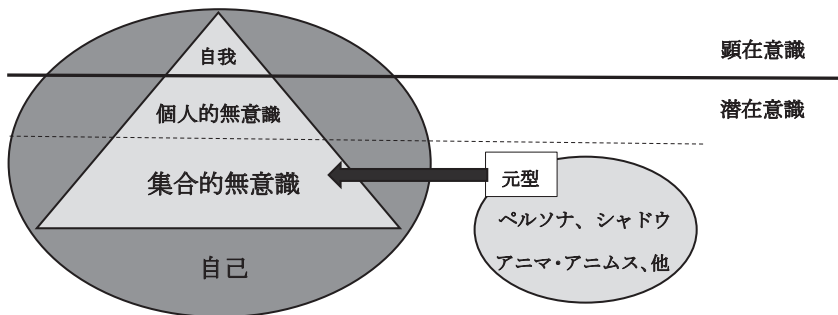
図Ⅱ-2 自我・自己の働きと自己実現

個性化の過程では、この感情—思考のような自己の反対物を合一しようとする欲求により自我の今までのあり方が揺るがされるため、自我の崩壊ともいえる精神の危機を迎えることもある。本論文で取り上げるアマテラスの神話も、女神・アマテラスが弟・スサノヲの攻撃に傷つき、洞窟に籠るという「古い自我の死」と言える危機的な体験をするが、そこでより素晴らしい神へと変容し、神々の導きにより岩屋戸から出される、というような体験をしている。また、ユング

[1995]によると、人間の心の深層には人類が遺伝的に持つ「集合的無意識」というものがあり、そこには「元型」という人類が共通に持つ心理的機能があるという。ユングの語る自己実現において、個性化の概念と切り離せない概念が、この「元型論」である。「集合的無意識」とは、無意識の層の中でも個人的無意識よりも深い部分にあり、経験的というよりは遺伝的にすでに備わっている人類全体の共通の意識のことである。

ユング [1982] は『元型論』の中で、「個人的無意識が、一度は意識されながら、忘れられたり抑圧されたりしたために意識から消え去った内容から成り立っているのに対して、集合的無意識の内容は一度も意識されたことがなく、それゆえ決して個人的に獲得されたものではなく、もっぱら遺伝によって存在している。個人的無意識がほとんどコンプレックスから成り立っているのに対して、集合的無意識は本質的に元型によって構成されている」と述べている。そして「元型」とは、その「集合的無意識」の中に誰もが持つ、人類に共通したひな形であり、本能に結びついた心の行動を構造化していく型である。そのため、「自己の要求を自我に実現させる」個性化の過程においても元型は重要な概念である。

元型には、自分の自我像にそぐわないために抑圧された一面と考えられる「シャドウ」や、男性の中で女性的な側面を補うと考えられる「アニマ」、それとは逆に女性の中で男性的な側面を補うと考えられる「アニムス」などがある。これら元型は、自身を社会的・性的役割に合わせすぎようとそれに見合った仮面「ペルソナ」を付けた状態が強すぎた場合、何らかの形で無意識から表出し、自我のバランスをとろうとするものであり、その点で「自己がこころ全体を取り戻そうとする」個性化の過程とも深く関連している。これら「集合的無意識」や「元型」の概念を図にまとめると、図Ⅱ-3のようになる。



図Ⅱ-3 集合的無意識の中の元型

元型自体は表象不可能であり、元型とはイメージやシンボルなどを通してのみ明らかになる仮説的な存在である。例えば、元型がこころに作用すると、母親や男性・女性などを思わせるパターン化されたイメージ像が、夢などで認識される。そして、元型のイメージは、その遺伝的な性質から人間が共通して持つ普遍的なものであり、それゆえにパターン化されたイメージ像も、神々の登場など神話的な風貌を持つこともある。

Ⅱ－２．集合的無意識に存在する影と異性像

代表的な元型にはどのような型があるのであろうか。ここでは、アマテラス神話に関連すると考えられる、「ペルソナ」「シャドウ」「アニマ・アニムス」に絞り、元型の特徴と働きをまとめる。

まず、「ペルソナ」であるが、「ペルソナ」とは、人が世界と立ち向かうときに身に着ける仮面であり、自身が周囲に適応するために装う「表の顔」である。しかし、性的役割や社会的役割にとらわれすぎて、このペルソナと同一化しすぎてしまうと、こころに心理的な硬さやもろさが形成されてしまう。

ペルソナが自我と社会を繋ぐ元型であるとしたら、「シャドウ」や「アニマ・アニムス」は顕在意識と潜在意識、つまり意識の中心である自我とこころの中心である自己を繋ぐ元型である。それらのうち、その個人の経験と関連の深いものが「シャドウ」である。シャドウは自我の抑圧などによって生きられなかったこころの反面、その人が何らかの理由で容認しがたいと思っている心理的な内容である。そして、自身の内なる異性像として現れる元型が「アニマ・アニムス」である。夢の中などにこれらが出てくる場合、前出した「シャドウ」が自分と同性の人物として人格化されるとしたら、アニマ・アニムスは、それとは反対に異性の人物として人格化される。ユング〔1995〕は、夢の中に現れる異性像、すなわち男性にとっての女性像、女性にとっての男性像が、心理的に非常に大きな意味を持つことに気づき、それらの元型として、男性の心的内面に現れる女性像をアニマ、女性の心的内面に現れる男性像をアニムスと呼んだ。アニマはエロスの原理、つまり愛や感性を強調したものとわれ、男性にとって感情やムード、非合理的なものへの感受性、人や物事に対する愛や関係性、無意識に対する開かれた態度などをもたらす。そして、アニムスはロゴスの原理、つまり論理性や合理性などを強調したものとわれ、力、行為、言葉、意味などをつかさどる。

「シャドウ」や「アニマ・アニムス」は、自我が「ペルソナ」との同一化などで偏りを見せた時、自己がバランスを補うべく、こころの深層から表出する何らかの形である。それゆえに、シャドウやアニマ・アニムスはペルソナと対比される。ペルソナが外面的人格の元型であるならば、アニマ・アニムスはそれに対して補償的にふるまうこころの内面にある機能的複合体としての元型である。

そうように、アニマ・アニムスは意識の補償作用として有益なため、「こころの全体性を取り戻していく」ための個性化の過程でも重要なものである。しかし、この元型が自我に取りつく「アニマ・アニムスの憑依」という危険もあるという。サミュエルズら〔1993〕によると、アニマ・アニムスに憑依されると、負の方向に人格変容が生じ、心理的に異性特有と考えられる特徴を重要視するようになる。

例えば、『個性化とマンダラ』にまとめられたユング〔1991〕の論文「個性化の過程と経験について」の事例の中に出てくるX夫人においては、彼女は高い学歴を持つ教養ある女性であったが、男性原理を重要視するあまり自身の女性的な部分を否定し、それゆえに生きづらさを感じてユングのもとを訪ねている。その生きづらさは、父権社会の中で男性的価値観の影響を受けている現代女性が抱える心理的な問題と共通するとも考えられる。そして、日本神話を読み解く中で、母を知らず父から生まれたという女神・アマテラスにおいても、X夫人のような傾向を見て取れると推測される。そこで、本文ではアマテラスや現代女性の心理的な問題にも「女性についての

アニムスの憑依」が深く関連しているのではないかと仮説立てている。なお、代表的な元型の名前と意味を簡潔にまとめると、表Ⅱ－１のようになる。

表Ⅱ－１ 代表的な元型の名前と意味

ペルソナ	社会に適応するための仮面
シャドウ	人格の否定的側面
アニマ	男性の中の女性的側面
アニムス	女性の中の男性的側面

Ⅱ－３．ユング心理学と「神話」

ユング〔1982〕は『元型論』で、神話の中に見られる集合意識と元型について、「神話とはなによりも『こころ』の表明であり、そこに表されているものは内的人格の本質的な部分である」と述べている。ユング〔1969〕は多くの夢を分析し、そこにギリシャ神話などにも表れるような、母や少女、子どもなどが規則的にみられることに注目して、心理学的に神話を研究した。そして、その研究で見つけた普遍的なモチーフ、つまり「象徴」こそが、人々が共通して心の奥に持つ「集合的無意識」の中の「元型」であった。

ユング〔1975〕によると、象徴とはそれが持つ明確な意味以外に、何か特定の隠された意味を持つものであり、象徴はそれそのもの以外の別の含蓄も持っているという。その意味を完全に説明することは難しく、象徴について探求していくと、そこには理性の把握を超えた神秘的な概念も見ることとなるのだという。

ユングが行った神話研究とは、心理学と神話を結び付け、異文化間の神話に見られる類似性から、神話とは人間が遺伝的に持つ「元型」が表現された人類の普遍的な形態であると論じたものであった。神話とは顕在意識と無意識とを含む「こころ」の表明であり、そこに表されているものは内的人格の本質的な部分であるという。神話からのメッセージを心理学的に深く読み取り、その内容が個人の心理的な問題解決の糸口となるならば、それも神話の心理学的研究の意義のひとつと言えるであろう。

では、神話に見られる根源的なこころの構造を探るべく、日本神話、特にアマテラス神話のユング心理学的解釈を行うとしたら、現代人にとってどのような叡智を見つけることができるのであろうか。『古事記』に記されたアマテラス神話を読む前に、まずはアマテラスの親にあたるイザナキ・イザナミ神話を見ていく。

その概要は以下のとおりである。

天地が初めてあらわれた時、神の国である高天原に3柱の神が成った。しかし、それらはすぐに身を隠してしまう。その後、次々と神が成り、これらの神々の後に成ったのが男神のイザナキと女神のイザナミである。『古事記』によると、イザナキとイザナミは、海をかき回してオノゴロ島を作り、その島に降りた後でイザナミの声がけにより交わり子を産んだ。しかし、生まれた子ども・ヒルコは手足のない子であったため、葦の船で流されてしまう。その後、天つ神から女神が先に声をかけたことが原因だったと言われ、イザナキの声がけにより交わり、子を産みなおした。その結果、立派な島々や神々が次々と生まれた。

鳥々や神々を生み落としたイザナミは最後に火の神を産んだことによりやけどを負い、冥界へ行ってしまう。深く悲しんだイザナキはイザナミを取り戻しに冥界まで行くが、そこで醜く変わり果てたイザナミの姿におののき、イザナミを怒らせた挙句に地上に逃げ出し、イザナミを冥界に閉じ込めてしまう。そして、イザナキが冥界から逃げ帰り、けがれを落とそうと海で左目を洗うとアマテラスが生まれ、鼻を洗うとスサノヲが生まれた。

サミュエルズら〔1993〕によると、母性原理を表す元型である母元型は生み育てる力を持つ反面、飲み込み破壊する力をも持つ。そのことから、生前の国を生む母と冥界で死をもたらす姿というイザナミの二つの相反する面は、母元型の持つ「生み－破壊する」という二面性を表すといえるであろう。そして、イザナミが冥界に閉じ込められたという物語は、母性原理の暗い一面に恐れをなし、それを切り離して意識下へと閉じ込めたことを揶揄しているとも考えられる。

Ⅲ. アマテラス神話に見られる「個性化の過程」

Ⅲ－１. アマテラスに見られる自我の未成熟さ

母性原理の負の側面を地下に閉じ込めるという、父権社会の始まりを推測させる背景のなかで語られる、「父から生まれ高天原を治めるも、弟・スサノヲの攻撃により洞窟に閉じこもり、最終的には神々に引き出されてより良い神となっていく」というアマテラスの物語は、古い自我が精神の危機を体験し、その後新しい自我に生まれ変わったと解釈することもでき、ユングのいう個性化の過程とも重なると考えられる。それを踏まえて考えると、アマテラス神話は男性社会の影響を強く受けながら社会や自己との関わり方を模索する、現代女性へのヒントを含む「女神の神話」とも言えるものではないだろうか。アマテラス神話が、そのような「個性化の過程」と「現代女性の自己実現」の2つにつながる可能性を踏まえ、アマテラス神話を解釈していく。

アマテラスは、冥界から戻ったイザナキが海で禊をし、左目を洗ったときに生まれた。そしてスサノヲは、その後イザナキが鼻を洗ったときに生まれている。イザナキはアマテラスに高天原を、スサノヲに海原を治めるように命じた。素直に高天原を治めるアマテラスに対し、スサノヲは会ったことのないイザナミを母と慕い、母に会いたいと泣きわめいてばかりいた。それに怒ったイザナキは、スサノヲを根の国へ追放してしまう。スサノヲは離れる前に姉にあいさつに行こうと高天原をたずねるが、アマテラスはスサノヲが国を奪いに来たと勘違いし、武装してスサノヲを迎えた。

その後、「あいさつに來ただけだ」ということを証明しようとするスサノヲは、誓約をして互いが双方の持ち物から子どもを産むことでどちらの言い分が正しいか占おうと提案する。そして、アマテラスの持ち物からは5柱の男神が、スサノヲの持ち物からは3柱の女神が生まれた。その結果を受け、勝敗があいまいなまま「自分が正しい」と勝ち誇ったスサノヲは喜びのあまり高天原で暴れ出した。

ここではまず、アマテラスが父の左目から生まれたということから着目していきたい。ユング心理学において頭部は精神性を表し、目は意識を表すことから、河合〔2009〕は、アマテラスが高い精神性を持つ神と考えることができ、その反面、母を知らないことから地母神的要素に欠けている、と述べている。一方で、林〔2004〕は、アマテラスが父の目から生まれたにもかか

ならず、その本質的な資質は非常に女性的なものだと述べている。『古事記』からはアマテラスの巫女的な性質が読みとれる記述があり、また、アマテラスが治める高天原が稲作地帯であることから、豊穡の女神という性質も持っていると考えられている。またアマテラスは機織りの神でもあり、これらの点でアマテラスはとても女性的だというのだ。そのアマテラスが武装して立ち向かうという行為は、自身の本質からかけ離れた行為であると考えられることも可能であろう。

そのようなアマテラスが高天の原の統治神として神の国を治めるも、スサノヲの来訪を攻撃と誤解し、スサノヲとのあいまいな勝負の結果にあっさり負けを認めてしまうという点において、アマテラスは「父の子」でありながらも論理性や一貫性に欠けているといえる。また、アマテラスのスサノヲを弁護するような寛大さに関しては、織田 [2006] は「正当な怒りを対象にむけることができず、むしろ加害者に同一化する」と解釈している。このアマテラスの行為を、悪に対して寛容な日本人の集合的意識というとらえ方もできるであろうが、一方では、相手の攻撃性に融合してしまい自身を守れないアマテラスの自我の未成熟さととらえることもできるのではないだろうか。

Ⅲ-2. アマテラスの岩屋戸籠りと心理的な「死」

スサノヲの暴行を止めようとしめないアマテラスは、その後も自身の弱さを見せることとなった。その続きは以下のとおりである。

その後、スサノヲの悪態はひどくなるばかりで、しまいには神の衣を織っていた機織り小屋の屋根に穴をあけ、尻の方から皮をはいだ馬を落とし入れてしまう。そして、その時、中にいた機織女が驚きのあまり陰部に機織りの道具を刺して死んでしまう。その後、スサノヲの行動に恐れを抱いたアマテラスは、天の岩屋戸を開け、洞窟の中に引きこもる。

河合 [2003] は、この時のアマテラスの恐怖が『古事記』の原文のなかで、父・イザナギが冥界でイザナミの変わり果てた姿を見た時の恐怖と同じく「見畏む（みかしこむ）」と表現されていることから、同じ類の恐怖であったと解釈している。そして、「父親が見たものは、女性の暗い反面であったし、娘の見たものは、男性の暗い反面であった。陰上を校で衝かれるイメージは明らかに性的な暴力を示唆している。…中略…このようにして、男性も女性も異性の暗い反面を知り、己のコントロールを超えた存在の認知を重ね、人間として成長してゆく」と、スサノヲの暴行をアマテラスの成長のきっかけとしてとらえている。しかし、その後のアマテラスがとった行為、岩屋戸籠りは成長というよりは退行といえるものであった。

それでは、アマテラス自身にとっては「岩屋戸に籠る」という行為がどのように成長へと変化したのであろうか。「女性が洞窟に籠る」という意味に焦点を当て、アマテラスが体験したであろう心的体験をひも解いていきたい。河合 [2009] は、アマテラスの洞窟での体験を「霊的で明るい側面ばかりが強調される太陽の女神アマテラスは、暗闇の中で自分自身の別の側面に直面しなければならなかったと言えるだろう」と述べている。のちにアマテラスが岩屋戸から出てより良い神となることを考えると、アマテラスの洞窟で自身の影と向き合う行為は、前文で述べた「個性化の過程」、つまり、無意識下に抑圧された自分の劣等な部分や否定している部分と直面しながら自身の反対物を統合していく、という過程と重なるのではないだろうか。

また、織田 [2006] は、「アマテラスは天の岩屋戸にこもることにより、超越的に黄泉国に移

動したと解釈することができよう。アマテラスは出生前の母であるイザナミに同一化したともいえよう。イザナミのイザナキに対する追跡に見られるように、アマテラスは同一化によって、原始的な怒りと攻撃性を生かされるようになったのではないだろうか」と解釈している。

アマテラスはスサノヲの乱暴によって間接的に「死」を体験し、岩屋戸籠りでもまた「死」を体験したといえる。それを個性化の過程に置き換えられるのであれば、アマテラスの岩屋戸籠りの状況は、まさに「古い自我の危機」といえるであろう。

河合〔2003〕は、アマテラスがスサノヲの暴行を受けた出来事とともに、この岩屋戸籠りも肯定的にとらえている。河合〔2003〕はここで、イザナキの黄泉の国からの逃走があったからこそ、その後の新しい展開が生じたことを指摘し、アマテラスの引きこもりも敗北ではなく、その後の神々の働きを導くために必要な受動性だったというのだ。

Ⅲ－３．アメノウズメの「再生」の踊りと「主体的受容性」

アマテラスが岩屋戸に閉じこもったのち、この太陽の女神を外に出そうと活躍したのがアメノウズメである。ここではアメノウズメとアマテラスに焦点を当てて神話の解釈を行っていく。

アマテラスが岩屋戸に籠ってから、高天原には暗黒が訪れ様々な災いが起きるようになった。それに困った八百万の神は「祭り」を開いてアマテラスを外に出そうと計画立てた。その神楽の踊り子であった女神がアメノウズメである。アメノウズメは自分の胸と陰部を露出させて神懸ったように踊り、そのため八百万の神はどっと笑いだした。それを不審に思ったアマテラスは岩戸を少しだけ開け、何が起きたのかと尋ねた。アメノウズメは「あなた様より貴い神がいらっしゃるので、それを喜び、笑い、舞っているのです」と答え、その間に別の神が岩戸の隙間に鏡を差し込んだ。それを見たアマテラスは、新しい太陽の神が別に現れたと驚いて身を乗り出し、その時に岩戸の脇に隠れていた男神に岩戸から引き出された。このようにして、アマテラスが岩戸から出てきたことにより、高天原には明かりが戻った。

このように、アマテラスは神々の画策により半ば強引に岩屋戸から出されたのであるが、河合〔2009〕や林〔2004〕は、これをアマテラスの変容と再生とみており、それゆえに、この引き出された場面を「個性化の過程」の最後の段階、変容と新しい自我の獲得、と取ることもできる。

この場面におけるアマテラスの女性としての変化においては、河合〔2003〕は、アマテラスにアメノウズメが「あなたより貴い神がいる」と言ったことを受け、アマテラスがアメノウズメの側面を自分のものにすることによって「より貴い神」になる、と言っていると解釈できると述べている。

廣澤〔2002〕は、アメノウズメの資質を「主体的受容性」という言葉によって言い表している。そして、「父の娘」の自己実現にとって、この「主体的受容性」を身に着けることが必要不可欠であるとも述べているので、それを少し紹介したい。

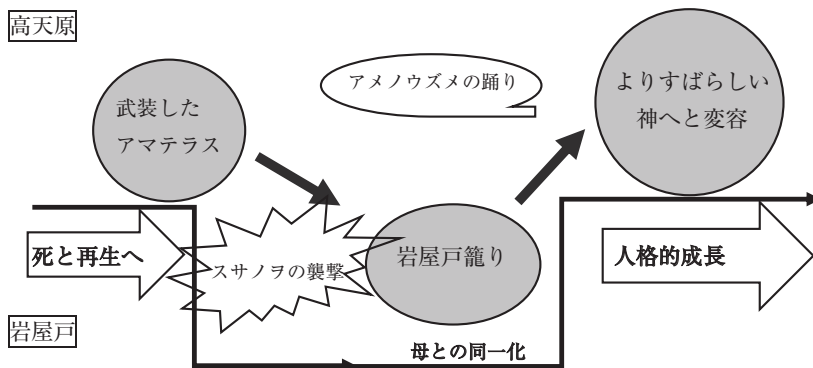
廣澤〔2002〕は、「神懸って踊ったアメノウズメが、自身の身体性を主体的に生き生きと体現しながら、その一方では八百万の神の前で『見られる身体』という客体としての身体となることを引き受けたことに注目している。「身体をさらして見世物になりながら、決して主体性は奪われず、笑われるものでありながら自らも笑うものでもあるところに、アメノウズメの強さがあり、主体的受容性が生き生きと根付いていることが感じられる」という。事実、アメノウズメの行為

は、最終的にはアマテラスのみならず八百万の神をも救う役割を果たす。

廣澤〔2002〕は、「スサノヲの侵入によりアマテラスは深く傷つき、洞窟に籠り抑うつ状態に陥るが、傷ついたことの痛みを経験することで、初めて本当の（等身大の）自分自身を見知ることになる。そして、ペルソナを剥がされたアマテラスが見た新しい世界がアメノウズメである」と解釈している。

廣澤は〔2002〕「豊穡性やエロスの側面に繋がる『主体としての身体』を持ちながら、同時に他者に見られ、笑われる『客体としての身体』をも生き、それを『主体的に』受け入れているのである」と、主体と客体の両義性を見事にこなすアメノウズメのあり方をまとめ、現代女性においても、このような主体的受容性を身につけることによって「真の自己愛と対象愛」へと開かれて、変容していくと述べている。その変容とは、自分に合っていない不必要な鎧を身につけることをやめ、自分の本質的側面をまとして向き合う強さを手に入れるという変化、といえるのではないだろうか。

このアマテラスが体験した一連の出来事を、第一章で述べた「個性化の過程」に当てはめると、図Ⅲ－1のようになると考えられる。まず、武装したアマテラスは古い自我とすることができる。そして、スサノヲの襲撃というアクシデントに見舞われたアマテラスは、「死」とも言える自我の危機に陥り、岩屋戸、つまり無意識に籠ってしまう。しかしそこで、母元型との同一化を体験し、またアメノウズメの踊りによって変容を遂げたアマテラスは新しい自我を手に入れ、より素晴らしい神へと変容し、人格的成長を遂げる。



図Ⅲ－1 アマテラス神話に見られる個性化の過程

Ⅳ. アマテラス神話と現代女性の自己実現

Ⅳ－1. 現代女性が抱える「父の娘」としての問題

ここでは、「父権的社会の中に生きる現代女性」をベレラの言う「父の娘」と捉え、アマテラスの変容と再生の物語が現代女性にどのように重なるのかを検討する。そして、現代女性にも起こりえるであろう「個性化の過程」の可能性について探り、それを女性の自己実現の可能性の一つとしてまとめてみたい。

「父の娘」という考え方は、ユング派の女性分析家から注目されていたものであった。西洋などに見られる父権的意識の高い文化において、長い間、女性の地位は低く扱われていたが、女性運動などを経て、女性は自分たちの社会的地位を高めてきた。しかし、高い社会的地位を得た女性たちの中で、自分たちの持つ「女性性」という本質が、その成功の犠牲になっていると感じる女性が出てきたことが、「父の娘」という考え方の発端だという。

ペレラ〔1998〕は、「女性性との関係でひどく傷ついているような、私を含めた女性たちは、普段は、相当な成功を取めているというベルソナがあって、公には好ましい印象を与えているのですが、そのことがむしろ問題なのです。…中略…つまり、彼女は彼女自身の固有な中核的アイデンティティ、すなわち女性的価値や女性的立場の感覚をほとんど持っていないのでした」と述べている。日本における西洋化の動きを考えると、現代社会の日本女性の多くが、この問題を大なり小なり抱えていると考えられる。

現代人は、意識する間もなく父権的価値観の中で育ち、それに見合ったアイデンティティを築き上げている。父権的社会の中で重要視される男性的資質とは、論理性や客観性、決断力やコントロールといったものである。これに対し、女性的資質と考えられる、感情や受動性、あいまいさや主観性といったものが、社会全体の中で一段低く価値づけられている可能性があるとしたら、そこで育った女性は、当然のごとく自分の持つ本質を低く価値づけ、男性と対等であろうとするならば、男性的資質を身につけようとするのではないだろうか。ペレラのいう現代女性の問題とは、そのような社会との関わりの中で女性の心に根付いてしまう、女性自身による女性的自己の否定であろう。

織田〔2006〕は「アマテラスは天の岩屋戸にこもることにより、超越的に黄泉の国に移動したと解釈することができよう。イザナミのイザナキに対する追跡に見られるように、アマテラスは（母親との）同一化によって原初的な怒りと攻撃性を生きられるようになったのではないだろうか」と述べている。それを踏まえて考えると、父権社会で育った現代女性も、父権社会では否定されている感情や受動性、あいまいさや主観性といった女性的側面を受け入れ肯定していくことで、より自分らしい自己を築きあげていくことができると考えられる。

Ⅳ－２．現代女性に求められる自己の内的課題への取り組み

現代女性が女性的側面を受け入れ肯定していくということは、具体的にどのようなことであろうか、そしてそれはどのような過程をたどるのだろうか。アマテラスにとって、岩屋戸へ籠るきっかけとなった出来事はスサノヲの襲来であった。

織田〔2006〕は、心理療法において「見ること、つまり面接することは相手を侵害することであり、見る対象を傷つける」と述べ、アマテラスとスサノヲの傷つけあう関係を心理療法のクライアントと治療者の関係に重ね合わせて見ている。治療者は決してクライアントを傷つけようと考えているわけではない。しかし、織田〔2006〕は、2人の人間が対人関係を持つときは必ず、両者は互いに愛着を向け合うだけでなく、傷つけあう存在にもなると述べている。そして、その「傷つけ、傷つけられる」関係から、互いの内的課題に取り組むことを強いられ、その関係は「癒し、癒される」関係に変化していくという。

前述したとおり、父権社会に生きる現代女性が抱える問題の1つとして見えてきたものは、女

性自身による女性的自己の否定であった。そして、アニムス、つまり男性的な鎧を被り自己保存的に生きている限り、その否定にすら気づくことはないであろう。しかし、個性化の過程が偏った自我のバランスをとろうとする補償的行為であるならば、いつかそのペルソナを覆すような出来事が起こるとも考えられる。それが、スサノヲの襲来に見られるような「傷つけられる出来事」として現代女性にも起こりうるのではないだろうか。

そのようなことを踏まえ、アマテラスとスサノヲの関係を現代女性の自己実現に重ね合わせて考えてみると、恋愛や結婚、またはそれ以外の親密な関係の中での傷つくような体験も「自己の内的課題に取り組む」きっかけとなっていくということではないだろうか。

アマテラスにとっての「自己の内的課題に取り組む」行為とは、ナイーブで傷つきやすい少女が、洞窟の中で「破壊する」太母の負の側面に触れることであった。それは、心の奥に虐げられた女性性の負の側面との融合と考えられる。土沼〔2002〕はアーサー王伝説に出てくる醜い老婆を取り上げ、その老婆を「男性からも、女性からも阻害され、拒絶された部分であり、またそれは恨みや、怒りや、絶望を含んだものであり、父権制社会、男性社会が始まってから、幽閉され、虐待されてきた女性性そのものの根源であり、真の女性性なのである」と解釈している。そして、「女性たちは、自分の中にこの、忌まわしく、醜くされた魔女を発見し、その声を十分に聞き、自分の中に統合しない限りは、本物の女性にはなれず、空虚さを抱えることになるのだ」と述べている。そこからは、自身の中で否定している醜い女性的自己を心の暗闇に閉じ込めておいたままでは、女性の成長も個性化のプロセスもたどることは難しいということが見受けられる。

Ⅳ－3. 「主体的受容性」と現代女性の自己実現

自己の内的課題への取り組みは重要であるが、アマテラスの「死と再生」に隠喩されるように、自分の抑圧してきた部分に向き合うことは容易ではないであろう。林〔2004〕によると、岩屋戸籠りのような心理学的な死と再生には本当に死んでしまう危険性もはらみ、再生するためには自分の力だけではなく、まわりの助けが必要になる場合が多いという。アマテラスの場合も、神懸ったアメノウズメの踊りにより、笑いという神々の感情表出が起こり、それが「まわりの助け」となりアマテラスが岩屋戸の扉を開けた。その助けのきっかけとなったアメノウズメの踊りには、セラピー的な側面も含まれていると推測される。

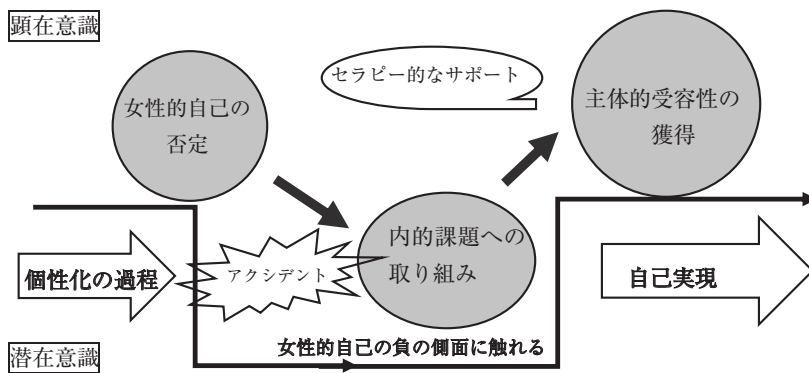
事実、ユング派分析家のウッドマン〔1987〕は、『女性性の再発見』の中で、踊りは現代女性の「死と再生」のイニシエーションの過程において、身体に耳を傾けるための実際的な方法であり、自身の内的課題と向き合う方法の1つであると述べている。

そのように考えてみると、自身の女性的自己を否定している可能性も秘めた現代女性にとっても、例えばダンスセラピーのように創作的に自分自身を表現するということは、個人の感情や身体との統合を促し、自身の神聖さを取り戻す手法の1つと考えられるのではないだろうか。また、踊りによる無我の状態は意識を集散的無意識へと導き、自身の心的内面にあるであろう「死と再生」の神話的元型ともつながっていくであろう。

神話の中で、スサノヲの襲来という危機により岩屋戸に籠り、そこで自身の暗い側面と融合したアマテラスは、その後、アメノウズメの踊りを機に岩屋戸から出て、より良い神へと変容し再生したといえる。その過程を現代女性に重ね合わせるならば、親しい人との衝突や別れによって

もたらされた人生の危機があったとしても、その人生の危機をきっかけに自身のこころと向き合う機会を持つことで、自身の女性的自己を否定していたことに気づく場合が出てくるかもしれない。そして、それを肯定していくことでこころの内側にある女性的資質と深く繋がることができ、より自分らしい生き方に近づいていくことができる、と言えるのではないだろうか。

そのような心理的危機の状況においては、心理療法などを受けることも役に立つであろう。そして、現代女性の自己実現を考えた時には、あえて人生の危機を待つことなく、自分がどのように女性的自己を認識しているのか、客観的な価値判断に基づいて否定的に見ていないか、ということに気づいていくことが大切なのではないだろうか。それが、女性的自己の肯定に繋がり、より自分らしく生きる自己実現として繋がっていくのであろう。そのためには、自身の存在を自身の心的内面と繋がった身体として主体的に受け入れていくことが必要となっていく。それを踏まえて、現代女性の自己実現の可能性を図に表すと図Ⅳ－１のようになることが推測される。



図Ⅳ－１ 現代女性の自己実現の可能性

そして、廣澤〔2002〕が述べているように、現代女性が抱えている次なる課題は、主体的な身体性を取り戻すだけではなく、そのうえで客体としての身体を生きることもできるという、アメノウズメに見られる「主体的な受容性」に開かれることであろう。

それについて河合〔1967〕も、ユングの言葉を用いて「個性化は2つの主要な面を持っている。まず1つは、内的・主観的な統合の過程であり、他の1つは同様に欠くことのできない客観的関係の過程である」と述べ、自己実現ということが自分だけのことなく、他の人々との関係の構築も含むことを強調している。そのようなことから、廣澤〔2002〕の「主体的受容性」を持って生きるということは、河合〔1967〕が言うような、成長に向かって変容し続ける女性的自己を持って生きるということであろう。そして、それがユングの「個性化の過程」であり、現代女性の自己実現と言えるのではないだろうか。

V. おわりに

本論文の目的は、ユング心理学における「個性化の過程」と「元型論」をもとに、アマテラス

神話のユング心理学的解釈をまとめ、その神話解釈から現代女性の自己実現のヒントを考察するというものであった。そして、そこから見えてきたものは、女性の自己実現において、社会的成功だけでなく心理的充足も得るためには、女性的自己を見直し受け入れるという過程が必要ではないかということであった。つまり、現代女性の自己実現とは、あいまいさや受容性などに見られる「女性として」の資質を見直すことの上に成り立っていると考えられる。

ちなみに、その後の日本神話におけるアマテラスは自身の強さで周りを引っ張る英雄的な指導者というよりは、周りの意見を重んじる世話役的な統治者という姿が見受けられる。そこに他人の意見を受容し、また他の国を征服する時も懐柔的である女性的リーダー像があるのかもしれない。現代女性のすべてが社会の中でリーダーとなって活躍していくわけではない。しかし、自分が所属する社会の中で自発的に行動しようとした場合、自身の中のリーダー的要素とともに行動しなくてはならないだろう。その時に、このアマテラスの資質が集会的無意識の中にある元型として、自分たちの意識の根底にも遺伝的に存在しているのだという思いで行動を起こすのであれば、社会の中でも自身の本質的なゆるぎない力を持って動いていけるのではないだろうか。

謝辞

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧に指導して下さいました佐藤裕之先生に感謝いたします。中間発表では、山崎浩一先生、本多勇先生からもご指導いただきました。ここに感謝いたします。

また、染谷明日香さんを始め同窓生や卒業生の方々からは常に刺激的な議論を頂き、精神的にも支えられました。ありがとうございます。そして、事務手続きの際に丁寧にご対応いただきました通信教育部事務室の皆さま、本当にありがとうございました。

参考文献

- Jung, C.G. and Kerenyi, C. [1969] Essays on a Science of Mythology. New Jersey Princeton University Press
- アンソニー・スティーヴンス、鈴木晶（訳）[1995]. ユング 講談社選書メチエ
- アンソニー・スティーヴンス、相馬寿明（訳）[1996]. 自己実現の心理学—元型論入門 どうぶつ社
- アンソニー・ストー、河合隼雄（訳）[2000]. ユング 岩波現代文庫
- アンドリュウ・サミュエルズ、バーニー・ショーター、フレッド・プラウト、山中康弘（監）、浜野清志（訳）、垂谷茂弘（訳）[1993]. ユング心理学辞典 創元社
- エーリッヒ・ノイマン、林道義（訳）[1949]. 意識の起源史 紀伊國屋書店
- エンマ・ユング、笠原嘉（訳）、吉本千鶴子（訳）[1976]. 内なる異性 アニムスとアニマ 海鳴社
- 大林太良（編）、吉田敦彦（編）、伊藤清司（編）、松村一男（編）[2005]. 世界神話辞典 角川選書
- 岡正雄 [1957]. 図説日本文化史体系1 縄文・弥生・古墳時代 小学館
- 岡正雄 [1958]. 日本民俗学体系2 日本民俗学の歴史と課題 平凡社
- 織田尚生 [2006]. 日本神話と心理療法—自然発生的治癒の布置— 東洋英和大学院紀要 vol.2 pp15-26
- 河合隼雄 [1967]. ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 [1977]. 無意識の構造 中公新書
- 河合隼雄 [1978]. ユングの生涯
- 河合隼雄 [2003]. 神話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄 [2006]. 神話の心理学 大和書房
- 河合隼雄 [2009]. 日本神話と心の構造—河合隼雄ユング派分析家資格審査論文— 岩波書店
- カール・グスタフ・ユング、河合隼雄（訳）[1975]. 人間と象徴—無意識の世界（上巻） 河出書房新社

- カール・グスタヴ・ユング，林道義（訳）[1982]．元型論 無意識の構造 紀伊國屋書店
- カール・グスタヴ・ユング，林道義（訳）[1991]．個性化とマンダラ みすず書房
- カール・グスタヴ・ユング，松代洋一（訳），渡辺学（訳）[1995]．自我と無意識 第三文明社
- シルヴィア・B・ベレラ，山中康弘（監），杉岡津岐子（訳），小坂和子（訳），谷口節子（訳）[1998]．神話に見る女性のイニシエーション ユング心理学選書 20 創元社
- 竹田恒靖 [2013]．現代語古事記 神々の物語 学研 M 文庫
- 土沼雅子 [2002]．女性のスピリチュアリティ 序説—女性性の回復にむけて 文教大学人間科学部紀要 vol.24 pp43-52
- 豊田園子 [1995]．女性的なスピリチュアリティと心理療法—ユング派の観点から 精神療法 vol.21(3) pp255-261
- 林道義 [2001]．心のしくみを探る ユング心理学
- 林道義 [2004]．日本神話の女神たち 文藝春秋
- 林道義 [2005]．ユングでわかる日本神話 文藝春秋
- 廣澤愛子 [2002]．‘現代女性の自己実現’と‘女性性による癒し’に関する一考察～主体的受容性を巡って～ 大阪大学教育学年報 vol.7 pp181-192
- マリオン・ウッドマン，桑原知子（訳），山口素子（訳）[1987]．女性性の再発見 肥満と痩せ症を通して 創元社
- 三島重顕 [2009]．経営学におけるマズローの自己実現概念の再考（1）：マグレガー、アージリス、ハースバーグの概念との比較 九州国際大学経営経済論集 vol.15 pp69-93
- 吉田敦彦 [2007]．日本神話の源流 講談社学術文庫